

モルダバイト^{ちゃん}の
ものがたり
物語





『ミチズサポートを知っていただける創作物語、はじめました。』

こんにちは、ミチコです。



モルダバイトちゃんのお話・『モルダバイトちゃんとお花畑』がスタートします。

この物語では、わたしが働いているMICHİ'S SUPPORTS(ミチズサポート)株式会社 ショールームに実際にいる、動物のぬいぐるみたちが登場します！

この物語を書いているのが、富士川 三希(ふじかわ みき)さんです。

わたしは、個人でお店を始めようとしている方や、教室を始めようとしている方にお部屋を貸したり、お話を聞いたり、スモールビジネスを応援しています。何かに挑戦してみたい方は是非一度お話しください！

そんな中で、作家になりたいと思っている富士川さんと出逢い、「どんな家に住みたい？」「どんな間取りがいい？」という会話から盛りあがって、ミチズサポートのこだわりポイントが分かる物語を創ろう！となりました。

さらに、主人公はお茶目でおちょこちょいでおてんばがいいかなあ、ということで(昔のわたしの性格のよう)妖精にしました。名前はモルダバイトちゃんです。なぜモルダバイトちゃんの名付けたのかは、また次の機会に。

今後どんな物語になっていくのか、温かい目で読んでいただけると嬉しいです！



『1話：モルダバイトちゃんとお花畑①』（文：富士川三希）

おんな こ めぎ いちめん はなばたけ ひろ
女の子が目覚めると、一面にお花畑が広がっていました。

けれど、知っているお花畑とはちょっと違うみたい。地面だけでなく、
お花畑の端にある塀にも、お花や葉っぱの絵が描かれています。

「どこかしら？ なんだか見たことのある景色な気がするけれど」

くび かし あた くら みあ へい
首を傾げていると、ふっ、と辺りが暗くなりました。見上げると、塀から
大きなゴリラさんが覗きこんでいました。

「きみ、だあれ？」

おんな こ くび かし
女の子はまた首を傾げました。

「だれかしら？」

しばらく考えてみても自分がだれだか思い出せません。

おぼ よ きみ
「覚えてないの？ じゃあ、モルダバイトちゃんって呼んでいい？ きみ
の深緑の瞳と耳飾りが、それとおんなじ色だからさ」

「すてきな名前を、ありがとう」

モルダバイトちゃんがほほえんでお礼を言うと、ゴリラさんが塀を越えて
そばに飛び降りてきました。その振動で、ゴリラさんとは反対に彼女の
体はポーンと大きく浮き上がり、辺りを見渡すことができました。

そこは植物柄の、大きな、大きなソファの上だったのです。

つづく



『2話：モルダバイトちゃんとお花畑②』（文：富士川三希）

「ずいぶんとおおきなソファだわ。ここはとってもおおきなうちのなかのね？」

「そうだよ、『ミチズサポーツハウス』っていうんだ。こだわりが詰まったおうちのさ」

モルダバイトちゃんがまわりをよくよく見ると、おおきなキッチンや、おおきなしょうめいがあるのがわかりました。

「楽しそう、たんけんしてみたいわ！ ……あら？」

モルダバイトちゃんは、はなをスンスンとさせました。

「どこからかこうちゃのかおのいい香りがするわ」

「じゃあ、つぎのいばさきはあそこだね」

ゴリラさんのゆびのさきをあつくと、おおきなテーブルのうえかまゆで微かに揺れているしろい湯気が見えました。

「どうやってあそこまで行こうかしら？ このソファから降りて、あのテーブルのあしをよじのぼるのはほねが折れそうだわ」

「それならばくにまかせて！ ちからもちだからあそこまで飛ばしてあげるよ」

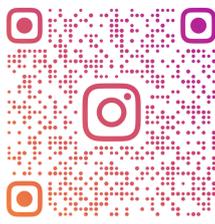
そう言うと、ゴリラさんはモルダバイトちゃんを両手のひらに乗せました。ゆっくりとあしを曲げ、腰を落としたかと思つくと、「ふんっ」と鼻を鳴らしテーブルに向けて勢いよく腕を振り上げました。

つづく





MICHIKO_NO_HEYA



MICHISUPPORTS

